

歴代18番 84年 ロス(金) 西川佳明(法大) 88年 ソウル(銀) 石井文裕(オリックス) 92年 札幌(銅) 伊藤智仁(三菱自動車) 96年 アトランタ(銀) 森昌彦(NPB東海) 00年 外野手(4位) 松坂大輔(西武) 04年 アテネ(銅) 松坂大輔(西武) 06年 WBC(金) 松坂大輔(西武)

福井!! 四球減らすには「脱力だ」



小宮山氏フォームは文句つけようがない



早大から鳴り物入りでプロ入りした3人の投手で、昨年最も結果を残したのが広島福井俊也投手(24)だった。注目を集めた大卒1位投手たちを追う「2年目の進化・真価」の4回目。福井はどんな進化を目指しているのか、日刊スポーツ評論家の小宮山悟氏(46)が、投球フォームからひもといてみた。

広島期待の右腕に本紙評論家がアドバイス

200回の力はある
福井に求める今季クリアすべき条件は180回を投げることだ。昨年は14

6回まで規定投球回数をクリアした。2年目、技術的に大きな変化は見られないが、投球フォームのいい部分を維持しながら

小宮山氏の期待値
180投球回

ら取り組んでいる。そういう意味で昨年の経験を土合にできるというのは、アドバンテージになる。設定したラインは普通

にケガなくやれば、クリアできる数字だ。そして到達できるぐらいの力はあるとみている。

気持ちで壁破れ
本人に聞いたことがあるのだが「打たれたくないという気持ちが強すぎてコースを狙ってしまっている」という話を聞いた。しかし、それは気持ちの持ちよう。自信を持って「少々なら甘く入っても打たれない」というぐらいの気持ちで投げられれば、壁を破れる。今年のフォームを維持できれば大丈夫だ。(日刊スポーツ評論家)

課題は克服済み
課題を克服した上で、このフォームになったのだ。昨年のワイドアップの写真が分かりやすい。良くない時のフォームだ。昨年の写真④で、かかとが地面に着き、お尻がイスに座るように下がってしまっているのが分かるだろうか。こうなる前にできる勢いをつけられなくなる。それが力みにつながり、制球を乱す原因になる。心がけなければいけないのは、いかにして脱力して投げるか。無駄な四球を出さなければ、福井という投手はもう一ランク上にいるから。バスケボールのマイケル・ジョーダンが舌を出してシュートしていた話があるが、そういうことを取り入れるのも、1つの策だ。うまくリリースの瞬間だけ力める方法を探して、コツをつかめればストライクはいつでも取れるようになる。

ほご前傾しているのいい。右足が伸びていて、リリースポイントが打者より出てきている。その前の、左足を踏み出す場面でのコマ(同②③)ではユニホームのスボン横のラインがずって見えていて、体が開かないのも分かるだろう。今年、セットポジションで投じているこの写真を見る限り、文句のつけようはない。本日はこの連続写真の少し後のコマまであるのだが、福井はボールをリリースした後、右肩が地面を指すくらいまわり、背番号が一瞬だけ見えるような動きをする腕がよく振れている証拠で、フォーム的には日本ハム斎藤、西武大石に比べ、格段に優れていると言っている。

福井の特徴はこのきれいな投球フォームにある。非常にバランス良く体を使っている。リリースの瞬間の1枚を見れば、今年の写真⑤。左足にしっかり全体重が乗り、左ひざと左胸がくっつく

佑、大石より上